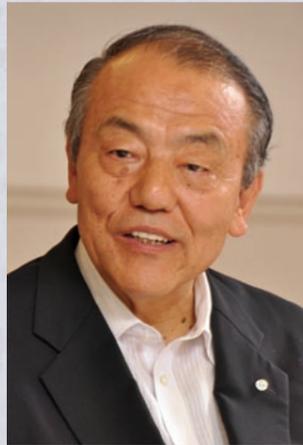


住民が集い楽しむ、 新しい公立図書館の姿



ひらやす まさと
平安 正知
おごり
小郡市長(福岡県)



のむら こうじ
野村 興兒
はぎ
萩市長(山口県)



まつざき ひでき
松崎 秀樹
うらやす
浦安市長(千葉県)



すずき かずお
鈴木 和夫
しらかわ
白河市長(福島県)

司会・コーディネーター

ほその すけひろ
細野 助博

中央大学総合政策学部教授

従来の図書館機能は、図書の貸し出し、学習空間の提供に重点を置いたものだったが、最近では、講座や講演会の開催をはじめ、ボランティアによる子どもたちへの読み聞かせなど、住民協働によるソフトサービスに力を入れる図書館が増えてきました。また、ICT技術を利用した施策や貸出システムの拡充など、効果的なサービスの向上、改革を目指す動きもみられます。

座談会では、新しい図書館サービスを提供する鈴木和夫・白河市長、松崎秀樹・浦安市長、野村興兒・萩市長、平安正知・小郡市長にお集まりいただき、取り組みの経緯や内容、具体的な仕組みづくりとその効果などについてお話しいただきました。

(本文中の役職名・敬称は一部省略しています)

新図書館には、「地域交流の拠点」としての機能も盛り込んだところ、利用者が格段に増えました。



鈴木 和夫
白河市長(福島県)

時代に応じて変わる公立図書館像

細野 現在、全国の都市の中で、公立図書館を設置している割合は98・5%、蔵書の総冊数は約3億2000万冊、来館者は年間約2億6000万人ともいわれています。もはや図書館は私たちの暮らしに身近で、欠くことができない拠点施設といつていいでしょう。

さらに、近年はICT技術を活用した施策や貸出システムの拡充、館内での講座や講演会な

どの開催など、ハード・ソフト両面からサービスの拡充を図る動きも顕著になっています。

それでは、各都市で実施している図書館の活動内容やその狙いなどについてお話しいただきたいと思っています。

鈴木 白河市では、平成23年7月に、新しい市立図書館を白河駅前に移転開館しました。これにより、図書館に対する市民の印象も、図書館行政の在り方も大きく変わりました。

従来の図書館は、建物自体が古かったことも関係していたのですが、閉鎖的なイメージが強く、本を読む人以外は訪れにくい環境にありました。もっと多くの人々が集い、交流の広場となるような図書館にしてほしい。そうした市民の声を受けて、新図書館には「地域交流の拠点」としての機能も盛り込むことにしたのです。実際に、会議室や多目的ホール、ミーティング室などを館内に設けた結果、会議や講演会、文化事業などが頻繁に行われるようになりました。

さらに、建物のつくりも工夫しました。本を読みながら駅前や白河小峰城などの景観を楽しめるよう外壁には大型ガラスを採用、従来とは見違えるほど、明るく開放的になり、イメージは一新されました。

その結果、当初は年間10万人と見込んでいた入館者ですが、予想をはるかに超えて約30万人。子どもから高齢者まで利用する、思い描いた通りの図書館になりました。

今後は、駅前立地というロケーションを生かして、衰退している中心市街地の活性化の起爆剤としても期待しています。市民会館も同エリアに設置する予定ですから、相乗効果を発揮していければとも考えています。

べて職員総出で行いました。

平安 私にとって2期目の市長選挙が行われた平成21年、私は市長公約に「役に立つ図書館づくりと読書活動の充実支援」を盛り込むとともに、「読書のまちづくり日本一」の実現を市民の皆さんにお約束しました。

以来、図書館を中心に、市役所の関係部署や学校などを巻き込みながら、「子ども読書の街づ

図書館業務も、専門性が
高くなるほど、聖域化が進み、
市民サービスがおろそかになる
危険性もあります。



松崎 秀樹
浦安市長(千葉県)

松崎 浦安市の図書館は、昭和58年に設置した中央図書館と8つの中学校区ごとに設けた公民館内の7つの分館で構成されています。それぞれコンピューターオンラインで結んでいるため、全館の資料は、どこの館からでも検索ができるのが強みです。

加えて、16・98kmと狭い市域であるため、10分歩けば必ず本館か分館にたどり着く、利便性の高さも特徴です。昭和53年から毎年1万人ずつ人口が増える、特異な発展過程を経た本市にとって、この図書館ネットワークの充実が、コミュニティの拠点という意味でも大きな意義がありました。

さらに、利用者サービスのさらなる充実を図り、通勤や通学で利用する市内の駅で、予約した資料の受け取りや返却もできるようにしたほか、病院に入院されている方などには市の図書館職員が、直接、本をお届けするサービスも進めています。

もう一つ、浦安市の図書館ならではの特徴として、図書購入費の高さも挙げないわけにはいきません。東日本大震災以後、応急復旧費をまかなうために2割ほどカットしましたが、それでも約8000万円をキープしています。

こうした施策を総合的に進めた結果、

くり推進事業」や家族で読書の習慣を共有する「家読推進プロジェクト」などを推進しました。さらに、平成23年には「小郡市子ども読書活動推進計画」も策定し、施策項目や目標も掲げています。

近年は公立図書館と学校図書館の連携、ネットワーク化にも尽力。市立図書館のサーバーで学校図書館の資料を一括管理し、相互に貸し借りができるコンピューターネットワークシステムとそれに伴う物流システムも構築したほか、教職員や司書教諭、学校司書などに対する研修なども進めています。

平成15年から図書館で進めている「ブックスタート」の具体的な効果を探るために、福岡女学院大学と連携して追跡調査も実施しています。その結果、「読み聞かせを行っている家庭では親子の絆が深まった」「読書好きの子どもが多くなった」などの事例が明らかになりました。

ちなみに、昨年、市立図書館が開館して25周年を迎えたのを機に、職員が開館時につくったラッコのキャラクターの名前の公募(ラックン)を行いました。市民に対してより親しみやすさをアピールできたのではと考えています。今後は、ぬいぐるみを作成し、キャラクターを持つている図書館との交流など、外部への発信に努めたいと思っています。

直営か、業務委託か？
図書館の事業実施体制

細野 それぞれ地域事情に合わせて、特徴を持たせながら、図書館事業を実施されていることが分かりました。中でも印象的だったのが、萩市の事業実施体制です。NPO法人との協働で図書館運営をされていることですが、近年

蔵書数は116万冊で、市民一人当たりの冊数は全国平均を大きく超える7・1冊を実現。一人当たりの貸出数も全国トップレベルを誇っています。

野村 萩市も、白河市さんと同様に平成23年に中央図書館をリニューアルオープンしました。これを機にまず取り組んだのが、事業実施体制の再構成でした。

NPO法人「萩みんなの図書館」を図書館運営のパートナーに位置付け、全国で初めて市と協働で図書館運営を実施する仕組みを新たに構築しました。この取り組みによって、蔵書点検の3日間を除いて正月も含めて年中無休。開館時間の延長も実現するなど、利用者サービスは著しく向上しました。恐らく、市の職員のみでの体制だったら、不可能だったでしょう。NPOの方々の努力には頭が下がります。

さらに力を入れたのが、各図書館の連携、ネットワーク化の取り組みです。合併により、東京23区以上に市域が拡大したわが市にとって、いかに効率的な図書館サービスを実施するかは大きな課題でした。そこで、市民に開放した学校図書館も含めて、4つの図書館をネットワーク化しています。3館では、インターネットを通じて蔵書点検や予約などができるシステムを構築。併せて、日々、移動図書館を市内くまなく走らせています。

財政状況が厳しい中ですから、浦安市さんのように十分な予算を確保することは困難です。従って、雑誌スポンサー制を導入するなど、なるべくお金を掛けない図書館運営も徹底しています。リニューアルオープン引越の際にも、ダンボールの収集から、運送も含めて、す

迅速な意志決定が
難しいため、指定管理者から
直営に移行。それが
機動的な施策の実施に
つながりました。



平安 正知
小郡市長(福岡県)

では企業人だけでなく、6次産業化を目指す農業者など、さまざまな人が利用しています。図書館は多様な可能性を持った施設ですから、まちの課題や特性に合わせて、それぞれ特色を持たせていけばいいと思いますよ。
平安 私も同感です。図書館はまちの課題解決のための支援センターでもあると思います。平成22年以来、全国の有志の図書館が「図書館海援隊」を結成して、地域の課題解決に向けた取り組み

は指定管理者制度を導入する公立図書館も急激に増えています。これはコストの問題だけではなく利用者サービスにも直結する問題だと思いますが、皆さんの都市ではどのような体制をとられていますか。
平安 平成18年度から20年度まで指定管理者制度を導入したことにより、全体で3500万円の経費削減を実現できましたが、その一方で、迅速な意志決定が難しいという課題も浮き彫りになりました。そこで、あえて平成21年度から直営に戻す決断をしました。
これにより、子育て支援、高齢者施策、男女共同参画、環境問題、食育など、市役所のさまざまな部署と機動的に連携した取り組みがスムーズにできるようになりました。直営移行の大きな成果だと思います。
鈴木 白河市も市の直営です。現在、正職員8名が運営業務を担っていますが、図書館のリニューアルに伴い、館長を全国公募したほか、6名いる司書の多くも市外から招きました。専門性を存分に生かして、市民の相談に応じたり、本の購入にあたってもらうなどしています。
野村 萩市では、市とNPOが協働で運営していますが、指定管理者制度は導入していません。あくまでも直営で、図書館業務の一部を委託する形をとっています。こうすることで、普段から意思疎通も十分に図れるし、市としての方針も明確に伝えられる。NPO法人としても主体性を発揮し、サービスの充実化を図ることができています。新しい公共にふさわしい運営だと思います。
松崎 浦安市の図書館職員は34名ですが、すべて専門資格を持った正規職員です。やはり、専門家だからこその質の高いサービスを提供するこ

地域の伝承を記録し、後世に
伝えるのも図書館の役割。
レファレンス専門員は
郷土史の調査も行っています。



野村 興兒
萩市長(山口県)

とができるんです。
ただ、課題がないわけではありません。課題の一つは、専門性が高くなるほど、聖域化が進み、ひいては、市民目線のサービスがおろそかになる危険性もあるということです。
浦安市では、全国に先駆けて、館内に喫茶コーナーを設けたのですが、当時の図書館長から猛烈な反対を受けました。最終的には押し切ったのですが、いかに図書館が聖域化しているのか、

みを展開していますが、小郡市立図書館はこれに早くから参加しています。具体的にはハローワークとタイアップして、関係図書のコナーを整備したり、講師を招いての講演会などを実施したりと、さまざまなアプローチを用いて、就業支援に取り組んでいます。
松崎 そうした具体的なサービスも重要ですが、こういう暑い時期などは、開館時間を延長して、夜中まで開放するだけでも市民の図書館に対する満足度は上がると思いますよ。「まちなか避暑地」という言葉もありますが、自宅の冷房を消して、眠れない夜中にご利用いただく。そうすれば、市全体の節電効果も期待できるし、熱中症予防も図れる。本に親しむ市民も増えると思います。市立図書館に提案してみたいですね。
野村 萩市は明治維新胎動の地ですから、郷土史や維新史のレファレンスサービスには特に力を入れていきます。利用者からの相談を受け付けたり、調べものの支援を行うレファレンス専門員も配置しているのですが、皆さん、研究テーマを持って、自ら地域に向かい、郷土に伝わる伝説や文化について調査したりしていますよ。
細野 地域には活字になっていない歴史や伝説も多くありますから、意義深いですね。
野村 ええ。例えば、萩市では盆踊りに「白河踊り」という独特な踊りを踊る習わしがあるのですが、この「白河」とは今の白河市のこと。その経緯をたどると、およそ140年前の戊辰戦争最大の激戦地、「白河口の戦い」までさかのぼることができます。
つまり、戦いが終わった旧盆の時期に、長州の諸隊の隊士が白河の領民と一緒に慰霊のために踊って、それを萩に持ち帰ったんです。こうし

市民サービスとかけ離れてしまっているのか実感しました。
野村 萩市の図書館でも、飲み物の持ちこみをOKにしたり、談話コーナーや喫茶室も設置しました。当初は「もし、飲み物がこぼれて、図書が汚れたらどうするのか」といった意見も聞かれました。本を大切にしたいという思いは理解できますが、市民よりも資料の方を重く見てしまうからでしょうか。
図書館に求められる、新しい機能とは

細野 今の話題とも関連しますが、近年は図書館の在り方が大きく変わってきていますね。従来は本を読むだけの場所といったイメージが強くなりましたが、鈴木市長が冒頭におっしゃったように、交流を深める場所として、さまざまな活動も行われるようになりました。
鈴木 とてもいい傾向だと思います。さらにそこから一歩進めて、「地域の課題解決の拠点としての可能性も追求したいですね。その問題意識から、新しい市立図書館には、地域産業を支援する「白河市産業支援センター」を配置しました。地元の中企業を支援、地域の産業界の強化を図る専門支援機関です。スタッフも4人ほど常駐して、起業をはじめ、さまざまな相談に乗っています。

細野 とてもユニークな取り組みですね。周囲の反応はいかがでしたか。
鈴木 計画段階では「何で、図書館に産業支援機関を設けなければいけないのか」と疑問を感じる議員さんも少なくありませんでしたが、関連資料を探して、なおかつ相談もできるとなれば、利用者としては便利だし、実際に役に立つ。今

た地域の伝承を記録し、後世に伝えるのも図書館の役割ですよ。歴史学者が書いたものだけが歴史ではないということです。
鈴木 この白河踊りが縁で、平成20年に萩市にお招きいただいたのですが、わが伝統の盆踊りが萩市で伝承されているさまを目の当たりにして驚きました。戊辰戦争の秘話ですが、これをきっかけに萩市と交流を深めることができました。

これからの図書館の方向性

細野 最後にこれからの図書館のあるべき姿や、今後の抱負についてもお話しただければと思います。

野村 萩図書館では、リニューアルに伴い、電子図書館も開設しました。まだコンテンツの絶対数も少なく、わが図書館でも2000強しか扱っていませんが、あと5年もすれば、電子図書の普及に伴い、コンテンツ数も増えるでしょう。そうすれば、図書館環境がガラッと変わりますよ。その意味ではいち早く電子図書館の窓を開いた意義は大きいと思いますね。
さらに、萩図書館は明治34年に全国初の郡立図書館として開館したということもあり、藩校明倫館蔵書や松下村塾の蔵書本などの貴重書籍





細野 助博
(中央大学総合政策学部教授)

を数多く所蔵しています。これらの資料をデータベース化することで、インターネット上で容易に閲覧することができるようになりました。将来的には、大学などの教育機関とタイアップしたり、国の助成も受けながら、デジタルアーカイブ化を積極的に進めていきたいと思っています。

平安 実はこの座談会の前に、国会図書館を訪問してきたのですが、来年から、国会図書館所蔵の電子データの閲覧と複写が、公立図書館でもできるようになるそうです。電子図書やアーカイブが全国の図書館で普及するきっかけになるかもしれません。小郡市でも平成27年度に市立図書館の電算システムを更新する際に、行政資料の電子化を図り、情報のワンストップ化に努めたいと考えています。

松崎 私もアーカイブは大事な取り組みだと思います。浦安市は東日本大震災に伴う液状化で大きな被害を受けたのですが、国自体も液状化のメカニズムすら把握していないことが分かりましたから、市が独自に土木・建築・地盤工学の日本のトップの学識者を招へいして「液状化対策技術検討調査委員会」を立ち上げたんです。約半年にわたる議論の結果、膨大なデータが集ま

りました。まずは、これをデータベース化して、内外に広く公表していきたいと考えています。

鈴木 野村市長がおっしゃった「郷土史」は、住民がまちに愛着や誇りを持つ上で、不可欠な要素です。しかし、こうした郷土史は学校教育の中で、おろそかにされてきたように思います。私はそれを非常に残念に思っています。

特に野村市長にご紹介いただいた「白河口の戦い」では、会津側だけでもおよそ1000名が亡くなりましたが、当の白河市では、これまでその歴史をほとんど教えてこなかったし、授業でも取り上げてこなかった。市民の間でも伝承されてきませんでした。白河に生まれた子どもは、白河の歴史を勉強して社会に出る。そうした当たり前のことがなされてこなかったのです。

そこで、今では小学校でも特別に郷土史を教えるようにしていますが、今後は図書館においても郷土史を学ぶための機能を向上させたい。絶版になった関連図書を含めて、アーカイブ化も進めていきたいと考えています。

平安 読書と学力には相関関係があるとも指摘されていますから、今後も子ども読書活動の推進に力を入れていく予定です。

これまでも「子ども読書の街づくり事業」など、多様な施策を進めてきましたが、今年から新たに「本は友だちプロジェクト」も展開していきます。これは、図書館を核としながら、市内の小中学校で、子どもが本と出会うきっかけづくりを進めるプロジェクトで、読んだ本の感想を子どもたち同士で伝え合ったり、その本の素晴らしい点をポップで表現するための講座なども行います。

今後も学校支援サービスをより充実させ、読

書好きの子どもたちが増えるよう、図書館を中心に取り組みを進めていきます。

細野 家庭の教育力が低下しているともいわれている中、「知の拠点」としての図書館の重要性は以前より確実に増えています。さらに、ビジネスや産業関連、そして地域の歴史など、図書館による的確な情報提供が果たす役割も見直されていますし、近年はICT技術の活用で、より図書館の利便性は向上しています。

皆さんのお話をお聞きして、そうした新しい図書館の姿が、より明確に見えてきました。同時に、図書館を核にしながら、市民をはじめ、さまざまな機関が連携することの大切さも痛感しました。これからの時代や市民ニーズに応じて多様な機能を担う、市民に役立つ図書館づくりに尽力されることを願っています。本日はどうもありがとうございました。

(平成25年7月9日、日本都市センター会館にて実施)

本コーナーは隔月掲載となります。次回は11月号に掲載予定です。

